

ましたた藏の周らの漆の跡は只今でも運畑になつて其面影を留めて居ますが物凄かつた森の跡は  
ございません然し十五六年前までは少しく大木が残つて居ました昔は夜半に木を伐る音や何か大  
きな物を投げるやうな響をさせましたので皆が天狗の仕業だと云つて恐れて居ました市中の子供  
の行術が分らなくなると提灯を点して其子供の名を呼んでた藏跡の森へ捜がして参つたものであ  
ります

▲牢内の泣聲 愛宕のた藏の奥に郡の牢屋が有りました牢番は新村と云ふ男と石田と云ふ男で能  
く覺えてゐます、牢の中には絶えず二三人づゝ罪人を入れてありました私共はツイ近邊に住んで  
ゐましたが牢の中で夜中度々罪人大聲を擧げて泣いてゐました人の噂さでは天狗が罪人を悪戯ふ  
のだと申しました罪人が御赦免になつて牢から出るのを見ましたが殆ど芝居にする石川五右衛門の  
やうで頭髪は蓬々として髻も延び居りますし顔の色は蒼くなつて眼の光が恐ろしく何とも形容  
の下さるもんぢア有りません

▲二人の女囚 年貢米御改正の時分に女の罪人が二人入つてゐました一人は橋北袋町の者で其頃  
が三十歳計り一人は婦負郡吉川村の者で二十五六歳で二人とも間夫をした爲めに道入つたので其  
名も能く知つてゐます初めは魚津の牢にゐたのを愛宕の牢へ移されたのであります

▲淫婦の晒物 其後又情夫をこしらへた橋北の者がゐました母親も娘も揃つて不義をしたとかで  
西町の高札の下で二人共妻折笠を被せ三日間晒りしてありました恥かしいものですから俯向いて

顔を見せぬやうにして居るのを通り掛りに傘の先で笠を突いて顔を見るやら種々悪口を謂つて笑  
つたものであります

▲賭博の處刑 其頃博奕を打つた者は茜木綿でこしらゑた赤い頭巾を被せて市中を引廻はしまし  
たが其後改正になりましたから片髪を剃り落して市中を引廻したことを覺えてゐます

### 愛 宕 の 御 藏

▲た藏の構造 私は婦負郡櫻谷村の愛宕に生れましたが私方のツイ近所に愛宕の御藏と云ふのが  
ありました左様唯今は神通大橋から一直線に国道線となりましたか彼の焼場へ往く道の間に建つ  
て居ました尤も御藏は外に赤倉と云ふのもあり又千石町のた倉と云ふもありました愛宕のお藏は  
周りは漆で、その漆に沿ふて大木が繁つてゐて晝でも物凄いい計りでしたよ、た藏は三棟あつて戸  
前が四つ宛着いてゐました

▲納米の状況 毎年十月になると百姓共が年貢を納めに参りますので十一月から十二月の二十日  
頃迄は晝夜を分たす人馬が絡驛として詰めかけますから中々の繁昌でありました、所が此の御米  
を納めるのが百姓の大心配で些細の事て落第致すことが有りますから其れの濟むまでは夜の目も  
合はぬ有様でそこは其れ往時は萬事袖の下と申して役人へ賄賂を致すことてありました先づ何の  
事はないから只今の米穀検査とか申すやうなものてありましたか只今は昔のやうに悪い習慣のな

いのが結構であります。検査は先づ米刺にて俵を刺してみることでした。落第が恐ろしいから一石の年貢米に三斗なり四斗なりの餘分を入れて置きます。其れを成る丈け検査の所に溢ぼさるやうにしたものであります。溢れた米はた藏敷と申してた藏の掛りが其懐ろへ入れたさうです。

▲納米の祝宴 首尾能く納めますると誓いた物か渡りますから其れを持つて各自のた屋敷へ参りますと御酒を下されますた屋敷でも此日は大したた祝ひで奥さまは立派なうちかけなどを着て出られました百姓は之れが濟むと重荷を卸ろした氣持がした。

▲役人の改正 新川の百姓一揆の折にも此に納めに種々不正のことが行はれると云つて願書を出したと聞いて居ります然し愛宕のた藏では改正になりました。米を見る役人は百姓中から撰まれ只今の石坂村の内山、外輪野村の若林、押川村の栗山など申される内の老人方が出ることになりました。

### 大 鷲 小 鷲 の 缺 壊

▲朝詣の最中 嗚呼思ひ出しても慄としますのは彼の大鷲小鷲の洪水でございます。妻方は其頃清水に精米業を致してゐましたか二月二十五日(安政五年)の朝、妻は五番町の願海寺へ参詣して居りますと恐ろしい地震が揺りまして皆が本堂を飛出しましてございます。其時富山の御城内の石垣が崩れまするじ、少し柔かい地面などは裂けて口を開けましたさうで、其時に常願寺川の水源の

大鷲 小鷲の峰が崩れ其山の下の方に大きな水溜ができたのであります。

▲人心の不安 うれから貴下、その水溜が今にも切れるくと云ふ評判で其所が切れますと富山中か海になつて了ふと申すのですから大抵の人は皆な道具を他へ預けました中には吳羽山の中茶屋迄持つて往つた人も多ふございましたか妻方でも道具は富山の町に知つた家へ頼んで預けました、左様いふわけで水の出るまでの人の心と申したら少しも落付くことはできませんでした。ヌルト三月の十日は清水祭で私は石金へた祭に参つてゐますと午頃から恐ろしい水の音がしまして大騒ぎで有りました然し其時は大したことも有ませんで私は迎へに來た者に連れられて歸りました。

▲家内に二人 それから愈々大變になりましたのは忘れもせぬ四月の二十六日で(同年富山では何の家でも午飯を喫べますと午睡をする風かございまして私の亭主は其時富山へ出て居りませす始男か二人目を醒しましたから茶煎で番茶を立て、凍飯を焼いて出して居ります、サア恐ろしい水の音で、大鷲小鷲が切れるがくと申す騒ぎでございます、サア左様申して居るうちに早ドン／＼泥水が横の川から溢れますでせう、愈々今度ころは富山の町中が全で海になつて了ふのぢやと氣が氣であります、其時分妾方には臼前がゐりましたが還して呉れと申して去つて仕舞ひますし姑と私の娘丈けは取敢へず若い者と一しよに富山の堤町の板倉へ立退せることにしてサツサと逃げたのでございます、跡には妾と男さんと唯た二人きりて心細いことと申したらた話になり

ませんでした

▲悲惨の光景 さわ左様して居ります内に水は漸々嵩へて来ましてグワラ〜といふ恐ろしい大きな響の絶間がありません、貴下考へて御覽なさい家のやうな大石が流れて出るのですから響く筈でございます橋と云ふ橋は皆流れて仕舞ひましたから富山が誰一人として来ることも出来ず又此方から参ることもできません其橋の落ちるとき餌指町の何とか云ふ家の主人と母親とが橋と共に押流されて其切りになつたのも有りましたが左様のは他にもまだ澤山有りました何を申すも五人が百四十人から有つたのですから其むごたらしい事申しては一々數へるわけには参りません其うちに援けて呉れい〜と悲しい聲で彼所にも此處にも呼ぶちやございませんか屋根の上へ登つたり樹の上へ攀つたりして叫いて居るのもあります材木などに縋つて流され乍ら呼んで居るのもございましたせう後で聞けば家丈けでも千五六百流れたと申しますから其筈でございます

▲避難者入來 ろれで私方でも最う流される事かと心配してゐましたが勇さんは横の川の畔へ出まして材木などの流れて來と押流し〜して岸の崩れるの防いで居られましたが幸ひに地面が高かつたものですから家には何の差障りもありません無事に助かりましたけれども全身泥水に浸された人が何人もなく遁げて來て助けて呉れと云はれますから其等を皆な家内へ入れて火を焚いて暖らせて上げてゐました其方々の話を聞くと身の毛も慄つこと計りでございます

▲再生の喜び 水が退きますと富山から亭主も歸つて来ますし親類の者共も皆な見舞に來て呉れましたが私共は疾くに流されたものと思つてゐましたさうで無事であるのを見て大層喜びましたでございます此時勳川の橋々が残らず落ちましたのは大場前が切れた爲めだと申しました富山の御領内だけの被害が十八ヶ村金澤御領内は何れ丈けあつたか分りません新庄の國道線へ穢多と農家とが澤山出ましたのは此時からで其れまでは今日のやうに富山の町と接続ではゐません稻荷町から荒川橋までは人家と申しては二十戸ばかりしかございませんでした

### 劍客 五平 の 手 練

▲下剱の藤吉 舊藩時代にをきましては富山の劍客中淺野五平先生のやうな仁は先づ珍らしい方であらうと存じます五平先生の劍術の達人であると云ふことは豫て聞いてゐましたが成程と驚いて了つた事がございます彼大關和七郎、黒澤忠三郎などと云ふ人が江戸のた邸へた預けになつてゐる頃私は江戸で髮結職を致してゐまして常々本郷のた屋敷へは出入をしましたが或時下剱の奥田藤吉と云ふ男を連れて御近習部屋へ参つて折角仕事をしてゐたのであります

▲稀代の早業 其時中肉で色の淺黒い一人の武士が爐の側に横になつて居られましたけれども固より誰方であるやら知らず筈は有りません藤吉が金盃に水を入れたのを持つたまゝ其れ方の上をヒョイと跨いだのです、イヤ私は仕事をしてゐて少しも氣がつかせませんでしたか跨いだと云ふことで、其跨ぐか跨かぬかにドシンと云ふ大きな音かしたので振回つて見ると藤吉が坐つたまゝ

う正氣を失なつてゐるのです何うしたのか一向分りません、ユルト其横になつて居られた人か、此畜生人を跨ぐなどは太ひ奴だと謂ひ乍ら活を入れられると、藤吉めボカンとして邊りを見廻はしてゐました、後で聞きますと天井裏まで抛上げられたさうです、うれで不思議なことには金盞の水は少しも溢しては居ませんでした、其武士か則ち淺野先生であつたのです

▲防火の秘術 其後富山へ參つてから淺野先生の門弟で藤懸と申す西四十物町に住まはれた方が毎日私の店へおいでになつて時々淺野先生の談か出ました出火の折に光嚴寺の隣家か唯一軒不思議に焼残つたことから藤懸様が話なされたことがございます實際御門弟たる藤懸様の親しく見ての御話ですから間違も有りませうか以前の大火の折に淺野の屋敷だけか不思議に助かつたのは全く五平先生の劍術のためだつたさうです劍術も名人となれば唯だモウ驚くの外は有ませぬ

▲飛鳥の如し 火事だと云ふので西四十物町に居られた藤懸さんは自分の家よりも先生の方が危険だと山王町の唯今郡役所のあります手前の四角の北にあつた淺野の屋敷へ駆けつけると此時は猛火か近くまで襲ふて來て今にも淺野家へ移らうと云ふ場合、フト見上げると屋根の上に人間が一人ゐる両手に各々木刀を持つて右に走り左に駆け宛然飛鳥の如く屋根の上を飛廻つて落來る火の粉を消して居る、熟々見ると其れか五平先生だ、藤懸さんも驚いて了つて、オア先生を危ぶございます早く下りなさらんと大變ですと下から聲を限りに叫びますと何に大丈夫だ早く歸れどこのことです、うれだつて熱いませうと頻りに氣を揉まますと先生は、戰場は今だ心配する

など謂つて蝶の如くに働いて居られたが果せる哉淺野の屋敷だけは火災を免がれたのであります

▲米俵突の術 之れも藤懸さんの話ですが大きな幕を張りまして幕の此方に五斗俵を十五奇麗に並べて積んであるのを五平先生は槍を以て一ツツ突差しては幕の向ふへ投げられたさうです併も唯投げるのでは無い幕の向ふへ自然に奇麗に積重ねられたと云ふことですが槍も中々でまたと見えます

▲山口流由來 淺野先生の流義は山口流と申しまして藩では最も廣く行はれました之れに次ては中條流でせう山口流は相州小田原の山口右馬之助と云仁が元祖て日本無双の名を取つた人です、うれから山口流を以て初めて常藩へ召抱へられましたのは山本新右衛門と申して二代藩主の頃であります此新右衛門から傳へてく兒玉榮右衛門、淺野五平、同権平に立至つたのであります

▲名人の系統 淺野先生の子息は若死てありましたが之れも中々腕は利いたさうです一度總曲輪の新舞台で金澤から來た劍客が擊劍會を開きました折淺野の若先生が最初何うした機會か小手を取られなかつた、然しうれから向ふの劍客を打伏せたの何のと無茶に叩き伏せられましたか流石に名高い先生の系統であると私も見物に參つて感心を致しました

## 髮結職の修行

▲不動に祈願 富山藩の藩について此程話を致しましたが私の髮結修行談を申して見ませうか私は富山に生まれましたか幼少から母に伴れられて江戸へ参り本郷の定床へ弟子入りを致して居ります内私の親方が折々稗史小説類を讀んでゐるのを聞くと一藝に達する人は大抵神佛に祈念するやうですから或時久しく外へ出てゐた兄弟子の龜と云ふが歸つて来て私か中床から下剃の位置へ下げられた無念さに無断で飛出し成田の不動へ参りまして斷食をさせて呉れいと頼みました所受人の判が要るとか申して容易に聽いて呉れない其内に親方へ知れて引戻されましたこともありま

す  
▲裏口より出奔 漸く年期を勤めて初めて四ツ目に床を持ちますと、入つて来た客か山伏で恐ろしい長い髪をしてゐますから種々と遣つて見れども何うしても旨く結はれません、詮方なく一寸待ちなすつて下さいと裏口から飛出した切り、丸裸になつて金毘羅参りと出掛けました、後から聞けば其山伏は何時迄も待つてゐたさうです

▲押搦いてう ろれからは多年旅髮結となつて殆んど國々を渡り歩いて修行をしましたが元來齋の種類の多いのに國々に依つて其風が違ふのですから唯今の散髮など、違つて日本一の髮結にならうと志してゐた私には實に一方ならぬ苦心でありました押搦銀杏といふに妙を得た人が當時作州倉敷にゐたから態々其れへ便つて参ると向ふても喜んで互ひに得意な術を交換することにな

つたか扱て其家は極々貧乏で私に食はすことか出来ませんから一先づ播州の姫路の千葉床と云ふのへ出掛け中風を患らつてゐる主人に代りまして六十日計り滞在し禮金として二兩の外に客人から一兩二分計り貰つたのを持つて再び倉敷へ参り其れて米を買つて漸く押搦銀杏の形を學んだこともあります

▲禮作と風習 旅髮結は淺黄の半股に盲編の脚絆、足袋、切緒の草鞋に尺八寸の刀を差し洵に禮儀正しいもので行先の床屋は必らず之れを迎へねはならず此方は又義務で手傳ふことゝなつてゐました先づ其家へ這入りますと小僧か足脱の湯を収つて呉れます、此方は何半一挺貸せ下さいと云ふ親方は、どうが休みなさいと云ふ互ひに二度護合ひます、夜業か濟むと酒か出て龜酒なれども一献と云ふのを此方は、駈出してございます萬事行届きません間違はずれば善しなにと挨拶して親方から呉れる盃を手に取りず、前同断の言葉を述べて同坐の弟子職人から順送りに盃を親方へ呈し之れて初盃を收め次で中盃大盃になり亂盃になると打解けて初めて禮儀を崩すのであります、それ弟子ならば御身内様、職人ならば友達と尊稱する方でした思へば一昔我々社員の風習も甚しく變つて來ました

## 町人の役目

▲九段の階級 舊富山藩では九ツの役目がありました先づ一番豪いのは町年寄です之れは資産家

の内から撰んだもので月に數回町役所へ詰め勘定方、用人、家老等へも召されることもありました即ち其頃に於ける町の政治にも關係を持つてゐた者で一般の町民から非常に尊敬せられてゐた羽織袴で小刀を前の方へヌツと出して差して歩いたものであります其次は九人衆と申し字の如く九人と定つた者で資産も町年寄に匹敵したる町年寄の候補者、其次は大人町人、其次は格式之れは大人町人の候補者たるもの、其次は町肝煎と謂つて庭に御用の高張を立ててゐた所を見れば非常の場合の役目と思はれます富山では三番町の三上屋と橋北の木屋が代々此役目でした、其次は年寄支配、肝煎支配とあつて此外に一町内乃至二三町内に町役と云ふのか三五名宛置いてありました、それから日行事一名歩きと申して町内の金で養つて置く者がありました

▲日行事の勢 町内の金で養ふとは云ひ乍ら中々勢ひかあります、それと申すは當時の人間は無學無筆の者計りてあつた中に日行事は町役から殆ど事務の全般を依託せられ筆算に達して諸種の配布などを致した爲めで日行事さんからてす判を持つて来て下さいと謂へば、直ぐへいと云つて飛んで来るし何でも分らぬ事があれば之れに聞ひた位であります

▲好まぬ役前 日行事は其れて幅も利けるし悪くはない役目でしたか他の諸役に至つては誰しも之れを嫌ひました、ツマリ彼等は御用金を出さぬ名稱のやうなもので他から尊敬はせられるけれども内實非常に損なわけてす其れ故互ひに常らぬやうに〜と心掛け殊更に資産の無い様子を装ひ魚を買ふにも鱈より外は買はぬ無論着物も木綿の糊した物を着て良家の女房などで軍笥の中に

幾ら立派な着物を蓄へて居ても外へ出るときは板のやうに堅い木綿物を用ひたものです是等を所謂菰冠りと申し、彼人は彼様にしてゐても中々菰冠りだせと云つたやうなわけで有ります

▲例巧者禁物 うれ故人間らしい者は家の禁物で若し多少文字が讀めたり理窟が分つたりする者があると町人で青表紙なんごを囓るやうでは彼男は家を壊して了ふぞと噂さしました馬鹿でなくとも馬鹿らしい者でありさへすれば御家萬歳でイヤハヤ話になりません自然人間が卑窳になる筈です礪波の方は餘程氣風が違つて政治思想も早く發達しましたが彼れは加賀藩の領下で而も金澤から離れてゐて壓制を受ける度合が薄かつた爲めでせう

## 清水の源助

▲に小屋もの 前には町人が壓制を受けたことを申上げましたが斯様に酷な政治の下にも流石に美事も少くは有ません出町(富山の)に御小屋と云ふのか建つてゐまして茲に收容されてゐる窮民へは藩から御給米があつて平常は藁仕事をさせてありました普通は細、草鞋、蓆、雪靴進んでバンドリ、帯の類ひで其餘暇に乞食をしたものであります俗にに小屋者と云つて卑しんでゐましたけれども維新後に小屋から出て立派な身代を造つた者も存じて居ります

▲清水の源助 此乞食非人を支配してゐたのは清水の源助と申す藤内でありますが中々勢力の強ひ者で非人締りは勿論汚穢物、死人などを焼くのも源助の支配で収入は大したものであつたさう

てす

▲源助 出馬 斯様に有福の生活をしてゐる源助先生平生は決して貰ひに出ませんが正月元日に  
は賑いうちから大將自から出馬します先づ

▲元日の収入 其扮装は袴を膝の一寸下の方で疊んで袖無し羽織を着し布の袋を肩にかけ家々へ  
遣つて来る、家へ這入る時には『ヤンラ目出度いな蜀光錦、鶴は千年龜は萬年御家繁昌れ目出た  
うございます』と謂ふ、サア源助が来たと云ふわけで分限に應じ町家でも武士でも夫れく祝儀  
を興へる下等の家ならば切餅五ツに米一攫み、一寸并つて切餅七切れに米一二合、進んでは餅の  
三十切れに米二升も出しまして平均一軒に餅十個米五合位に當つたさうです其頃の餅は二舛四十  
切れ形も大きく十萬戸に五十石ですな、米も亦五十石中々の収入であります

▲しめの祝儀 源助が来ると間もなく『シメ』と云ふのが遣つて参ります之れは女でありますが圓  
形の目の細かい奇麗な籠を抱へ各々區域を定めて數人が廻るのですシメが来ると決して残物を興  
へない特に平に膾とか云ふ御馳走をしたもので之れも亦少なからぬ収入でありましたさうで  
す

▲盲人の物貰 其外座頭座と云ふのが有つて結婚などの祝ひことがあると必ず三四人連れで金を  
貰ひに参りました其後座頭座が廢せられてから『もうかう派』と云ふのが出来て矢はり盛んに強情  
に参つたもので今日に比べては寛やかな政治でありました

## 昔の警察

▲公事場檢方 舊時代の富山町人の役目に就ては先般お話し致しましたが彼れを行政方面の話と  
しますれば今度は是非とも刑事上のことを申さねはなりません、さて往時富山に公事場と云つて  
重大の事件を取捌く役所か御ざいまして其下に檢め方と云ふのがありました此あらため方の手先  
に清水の八右衛門と云ふ男かゝりて自宅に半屋を持つてゐました半屋は此八右衛門方と長柄町と宕  
愛どの三ヶ所であります

▲手先の勢力 此清水の八右衛門は澤山の配下を有つてゐる自宅には十手、棒、捕縄等を飾りつ  
け中々勢ひのあるもので犯人を捕縛することも餘程發達してゐたさうです然し八右衛門は主に町  
人の刑事犯を扱つたので足輕以上になりますと手に掛けなかつたさうです身分のある者は公事場  
に於て扱ひました

▲糞くらひ狗 今も昔も變りませぬのは探偵の手先となる謀者であります昔は之れを糞喰ひ狗と  
申して無頼の者共ばかりてした奴等は公々然として賭博を致し役人か來ても平氣なもので、サア  
た上りなさいお茶でも一つと謂ふ調子です其頃一寸した犯罪の爲め入牢、組合預け手錠しまり等  
に處せられた者の家族か糞喰犬の許へ賄賂を持つて頼み來ると糞喰犬から檢め方へ頼んで免され  
たさうです其爲め非常に収入があります其代り檢め方の役人から時々文箱の中へ手紙を入れて五

両貸せとか十両貸せとか謂つて來ることがありますと直ぐ其箱へ金を入れて贈らぬばならなかつたさうで、ろこで又市内に秘密の賭場が澤山開けてゐました之れは主として素人連中の何方かと思せば着實に遣る側ですが之を糞喰ひ犬が嗅ぎ付けて遣つて來ますと、ヤア親方がたい下なさつたど大變御馳走をする、糞喰ひ先生は傲然たるもので自分が役人へ金を出す代りに是等の連中から何両出せと云つて強制的に取つたのであります其れ故誰だつて其處爲を卑まぬ者は有りません糞喰ひ犬と云ふ名からして嫌惡の意味を示してゐます

### 密輸物の取押へ

▲口々の警戒 昔は他藩領内から米を買ふとも此方から賣出すことも禁せられてゐました、又魚は鱒、鱒、鯖、鳥賊の外は町賣りを禁せられてゐました其外の魚類は一切問屋へ出したものであります、之れを取締るには押へといふ役人がゐまして小杉口、飛弾口、新川口等へ出張り乍ら違犯者を捕へることになつてゐました見付けたら其品物を用捨なく取上げて了ふのですかて堪りませんや

▲間道の密輸 新川口なては稻荷町の端の赤江川が境ですから彼所へ出てゐます、其れで知つてゐる魚商人は夜に乗して密りり間道から賣りに來る、而して首尾能く町へ入つても賣るのは中々危険でありますから一寸の油断もならぬ若し目付られたが最後荷物はソックリ奪られて了はなげ

ればなりませんから其害です其代り時として商人が五六人も隊を爲して遣つて來る時は却つて押への役人を取巻いて半死半生の目に遇はすことも珍らしく有ませんツマツ平生の仇を討つのです

▲商人を助く 市中で魚商人が押へに見付られますとサア來たと謂ふのでドン／＼遁げる。跡から追かける、遁げる奴は泥草鞋のまゝで町家でも武家でも構はぬ飛込むと大抵の家では裏口から遁がして助けたものであります可哀さうに思ふからであります

▲冒險的米買 米も同様ですが加賀領へ買ひに往けば一升に五文なり七文なり安い一斗に七十文も違ふ昔の七十文と云へば大したものですからツイ慾に引かれて女などが小杉の方面へ買ひに出るのを押へが毆打した上折角買つて來た米を取上げたこともあります

▲關所ぬけ賣 飛驒を目的に米、油、鹽を商ひに出る者が多いのみならず向ふからは鑛山の銅銀等を持つて參りますから押へは中野口へ出て眼張つてゐます其外關所の設けがあつて嚴重に取調べますから容易に密輸はできません、けれども首尾能く是等の目を抜けて一回行けば中々の利益がありますので命がけで出掛ける商人が絶えませんでした、何うして往くかと云へば川の沿や山の小道を取るのです是れも亦商人隊を編成し番所荒しを試みたことも有りました



## 安政災後の視察

▲避難の仮屋 私に安政五年の大鷲小鷲大災後被害地の惨状を一見する考へで災後殆ど一ヶ月即ち三月の二十七日に家を出ました其日は千俵村の得法寺に一泊し翌朝五ツ半頃から女四五名に友人兩名と其處に立ち野村平兵衛方に暫らく休息し其れから田島村西源寺に一寸參詣致し小栗村小原屋村を過ぎますと向ふの方にズット山が横はつてゐます其半腹にある文珠、花崎、中崎の各村に竹を結んで藁屋根を葺き僅かに數人を容れ得るやうな仮小屋か何百となく列んでゐました是れは何れも避難者の籠つてゐる所であります随分惨憺の光景でありました

▲山中の巨音 上瀧町の茶店で休み瓢の酒を傾けて勇氣をつけてゐます内今朝からの小雨は車軸を流すやうな暴雨となりましたが其休んでゐる間に太砲のやうな響きが聴こえた之れは山か鳴つてゐるので人々は猶ほ安き心とは有りませんでした

▲驚くべき光景 上瀧から三丁計り進むと此邊は被害の最も烈しい所ですから煙霧朦朧として川の水は恐ろしい勢ひで危険此上も有ませんから各々手を引き合つて川の方へ下つて参りますと今猶ほ田野は數量の泥海で家のやうな岩石が數知れぬ計り轉かつてゐますし林木などは山のやうにありませんが誰一人として拾ふ者は有ません此邊に間瀬口川除と云つて高さ七八間幅十間計長さ數里に亘る三國一の稱ある大堤防がありましたけれども今は形も残つてゐませんでした水勢か如何に猛烈であつたかは是れを以ても想像せられます

▲水神の靈祠 此邊に水神の宮と云ふのがありますして宮の四面は勿論境内も泥海となつたのですけれども宮の建物丈は依然として流れもせず遺つてゐました流石は水神であると私共一行の者は感嘆致しました

▲前代未聞事 或は山のやうな巨岩の上に登つたり丘の上に登つたりして四方を眺望しましたが東村西郊無數の家屋を流し老幼婦女を流した其跡は目も當てられぬもので仕舞ひには心持が悪くなり抛へた酒を飲んで纒かに氣をまぎらせ歸路に就ましたが凡そ天災少なしとせざれども彼時のやうな惨害は當國では前代未聞のことでありました

## 町人百姓いため

▲嫌な赤合羽 藩時の赤合羽と謂つたら只今申す破落漢のやうなのが多うございましてたれ作廻りとか長柄とか云ふ連中は酒を飲みたければ飲屋へ這入つて勝手次第に唯飲みする二升樽を持つて来てトンと置けば無料で酒を詰めて出さねばなりません

▲ごろつき士 赤合羽計りちや有ません武士の中にも無茶な人か多かつた例へば魚籠を持つて魚屋へ来る、その鯛を入れて呉れと云ふから入れて出すと錢を呉れないのです、且那樣錢は、と聞くと、毆倒されるなど云つて平氣で立去るのがあります、千秋とか林とか淺野とか云つたら有名な人々てした其代り毎度閉門を仰付られてゐたもんです其頃町人は手形の流通を無制限で許さ

れてゐましたか例の武士先生遣つてきて手形の名前を貸せと強制に書かせたもので、手形の信用を得たのは石坂屋車屋などでありました是等は金よりも尊はれたものです

▲百姓の困難 百姓には小歩き、町百姓、肝煎、十村、扶持人などの役がありまして町人の組織と略は似てゐました武士の知行取りは皆自分の知行所の百姓を持つてゐましたから是等の士から敷次金を貸せ〜と云はれる爲め百姓の頭は上りません其れ故資産のある百姓でも中以下の者に床を張つた家は少なく入口には席を清し町へ出る時は草鞋に番取姿と定まつたものです

▲皆濟の馳走 當時富山の覺中町にタヤと申す者が建つてありました十村タヤ扶持人タヤと云つて澤山の役人が詰めてゐるが茲に番代といふ者もゐました番代は株になつてゐて其株は非常に好い値を致したもので、タヤは百姓の納米を扱ふ役所で年暮になりますと架木を澤山打込み不納者を之れへ縛り上げて叩いたものです青醋な事を致したものです其代り首尾よく米を納めますると知行所の百姓は士族の屋敷へ招かれて大變の御馳走になります之れを改正の御馳走と云つて物の喩ゑに謂つた位ですがアレは改正の御馳走ではなく皆濟の御馳走即ち米納を全く濟ませた祝ひてあります私は百姓では有りませんが時々招待を致しましたハラ〜の大根汁などが毎度出たものであります

## 弓術の盛衰

▲九年の修行 私の祖父は初めて富山藩の弓師に召抱ゑとなり父も其業を承継ぎましたか不幸にして早死致し私は弓の製法を修行するために三十六ヶ月宛三回江戸へ参りました弓の細工は中々六つかしいもので殊に塗方は秘傳かありますから金澤へ出るよりは諸大名の集る江戸に限ると謂つたやうなわけで九ヶ年の勉強を致しました私は當年七十五歳であります

▲た弓所の役 昔は富山藩の弓術のことは一切た弓所に於て取捌きましたたが上役は青山佐太郎、磯野喜馬太、能勢某 富田織江に吉田さま、私共は下付と申して身分は足輕でありましたが弓臺の家は織田伊助、谷村作次郎、矢は市村嘉平、同嘉左衛門、成瀬幸左衛門、矢の根は中谷平八、巻薬は福村興平、弓は柴岡又十郎、三輪源造、笹川嘉左衛門と夫れ〜定まつてゐました嘉左衛門と申したのは私であります

▲弓具の修繕 た弓所では月六齊に弓所の才許と云ふのが張直しから修葺をすることでありましたか貸道具が澤山ありましたから其仕事は中々絶ゑることでありません夏になれば蟲干をして矢には樟腦を入れて夫れ夫れ始末をするのであります

▲弓術の練習 弓術の稽古は家中は四の日と十日とに廣徳館で行はれ足輕は別に千石町の只今師範學校の敷地になつてゐます邊りて月に三度宛ございました此時には上役が出て檢分を致します矢數は一人五十本宛で六分宛三回中れば御褒美に銀一兩、七分宛三回中れば二兩、八分宛三回

中ねは三兩、九分には四兩、皆中は徒歩組に引上げられるのでありまするか百五十本残らず中  
ることは先づ御ざいません

▲管中の名譽 私江戸へ出てゐます頃本郷のた屋敷で管中をいたしました所、右の者昨夏以來管中  
稀なる儀に付加俵仰せ付られ候と云ふ書付を戴きました其頃は御家老の山田嘉膳さまが高島流の  
西洋砲術を盛んに御奨励になりまして弓術は大分衰へてゐましたから徒組にもならず二俵の加  
俵で済みました

▲名人の傳彌 吉田さまは名人でありました吉田傳彌様は金澤から召抱へになつた四百石の家で  
したが其内百二十石を吉田矢守、八十石を吉田勝十郎と云ふのへ分知になり二百石取で杉苗に居  
られましたか庭にゐる雀を射留められたと云ふ話であります

### 平民的殿様

▲御兄弟三人 有名な富山の殿様龍澤院即ち長門守さまの事は私の中すまでもなく御存じのた  
方も多うございますが其の御兄弟は左京、兵庫、頼母の御三人で左京さまは頗る温厚な性質、芳  
卉を栽培したり鳥獸を飼ひたりして學問にも志の深い方でありました頼母さまは西四十物町に  
住ばれ生涯獨身生活をされた奇人で女を見れば逃げられると云ふ位ひの女嫌ひてありました扱て  
真中の兵庫さまには故あつて私は一年餘り御實最に預り悉しく其の御性行を存じて居ます

▲氣遣ひ殿様 世間では兵庫さまの事を狂人殿様と評したもので随分畏れを爲してゐました成程  
心なく其行ひを観てゐますれば狂人どしか思はれますまいが私は聊か見所の違ふのであります

武の心得 兵庫さまのた屋敷は只今師範學校の敷地になつてゐますが其頃は俗にた住居と申  
す尤も後には鹿嶋神社の附近へ御轉居になりました兵庫さまと申すは体格の立派な方です身  
丈は五尺四五寸もありませうか色白にして鼻隆く眉濃く所謂好男子でありました其れで武術は一  
切できまする上に學問もでき亦馬術は最も得意で有名な荒れ馬に乗つて土堤へ駆登つたり駆降り  
たり自由なもので時々落馬しても平氣なものでありました何でも平地の稽古をするやうな人では  
有りませんてした

▲遊藝何でも 遊藝に至りましては三味線、淨瑠璃、芝居、物真似殆んどできぬ事の無い位ひて  
輕業などは坐敷の柱から柱へ細引を張りまして其上を傘をさして渡ることが誠に名人下ありまし  
た甚たしきに至つては大神樂がた上手てた庭へ出て「マル」を七ツも使はれされた一寸出米ないも  
のなさうです

▲女役の名人 月に二三度づゝもた屋敷で芝居をされます澤山見物人を入れて大道具小道具鳴物  
などは一切本物で其れはくゞ大變な騒ぎです其れて殿様の兵庫さま御自身は何時でも女方と定つ  
てゐました忠臣蔵ならば先づた輕に扮られるのですが藝は誠に巧い、見物人が感心として見て居  
ると聽て其れ輕が突然着物の前を捲くりましてソレ例物を見物に見せるのです女どもは吃驚して

アレー出たーと叫ぶやら笑ふやら、其途端に幕になるので芝居をなさると必らず例物を見せられましたので、

▲湯屋淨瑠璃 兵庫さまの淨瑠璃と云つたら是れ亦た手に入つたもので素人淨瑠璃などがあると自身ブラリと遣つて來られるサア御前さまだとか殿様がたいでになつたとか謂つて騒ぐと甚だ不興で金の一分も出して、た邪魔ぢやつたのうと言葉でブイと立去つて了ふ其れ故殿様であると云ふことを知つてゐても殊更に知らぬ顔をしてゐると自分も一席語つて頗る御満足で歸られました、時々湯屋へた出掛けになつて入口の板の腰掛へ腰をかけ顔へ手を當て、淨瑠璃を語られるのがた好きて其折も兵庫様だとか殿様だとか云つて皆が騒ぎ出すと不愉快さうな顔をして匆々に遁去つて了はれるが例の通り知らぬ顔で、此の爺め邪魔臭いと謂つて殿様を足で蹴倒すとか云ふやうな事をすると思ふで居られる洵に、ごうも其舉動が常規を外づれてゐましたから世人が狂人だくと評したのも無理は有りませぬ

▲絆纏の質入 私共の店へも時々たいでになりましたが能く其の御性質を知つてゐるもんですから誰でも平氣な顔をして敢へて尊厳をしませぬのです或時などは着てゐる絆天を脱いで放り出し是れを質に置いて呉れと云はれるのですうんな時に、御前うんな事をなさつては宜しく有りせんなど、云つたら必ず不機嫌になるのを知つてゐますから宜しうございませんと店の若い者に持たせて質屋へ走らすのであります兵庫さまは羽織を着ないで、いつも絆天を着て居られました

▲微行の買物 さういふ風に其頃士族からは輕視されてゐた町人に接近することが好きて當世の言葉で申せば平民的のた方でありましたうれが殊更らに其様な逸事奇行をせられたのか天性好んで行られたのかは分りませんけれども決して世人の想像してゐたやうな氣迷ひてはなかつたと思ひます、と申すのは徒らに暢氣で放縱なばかりではなく私共の店て種々の世間はなしが出る折何屋は不法な高賣だ何屋は勉強をして安く賣ると云ふやうな事をた聞きになると御自分で赤合羽を着て仮令へは小豆の三合も買びに行き之れを實驗せられる、自然其事が商家へ聽ると恐縮して直ちに値段を下げるのです、何故恐れるかと云へば理由のあることとて武士でも不心得の者は度々兵庫さまにイジメられたことがあります

▲途中の苦言 商人の賣値とか不正の行爲などには前申した通り注意されましたが武士の行ひに就ては猶更のこととて近臣等の謂ふ所を聽き後向不都合のある男とか傲慢にして下を虐げたる者とか君公に不忠な輩とかに對しては必らず兵庫さまが制裁を加へられました兵庫さまの登城は町足輕二人若黨槍持等を隨へられるのであります今には何某をイジメてやらうと考へられた時には殊更に其者の登城すること往曾ふやうにする向ふては兵庫さまを見ると槍を伏せてビタリと下座をせねばなりません 此方は其まゝ何時までも立つてゐるから向ふては仕方がないので其間平伏して畏まつてゐる、ムルトれ前は此頃大分精出して兄に善いことを勸めるさうだな、と云ふやうな寸鐵人を殺す言葉を掛けて別れるのであります

小好臣いじめ 或時私の店へたいてになつて、アンドン／＼と聲をかけられました之れは兄殿と云ふので、私はへいと答へるサア之れから往かうと云ふので宜しうございませと直ちにた伴を致しました何處へ往かれるのと思つたら例の士いじめに出掛けられるので或馬廻りの家へ突然と入込まれました、其家ではサア兵庫さまだと云ふので狼狽を極の俄かに御料理の用意をするやら酒を暖めるやら上を下へと混雜し扱て酒宴を開きました、奥様が出て殿さまへ挨拶をされると直ぐ手を捉えて御自分の膝の上へ引寄せ片手で其首筋を抱え放されませんりして種々と嫌からせを云ふのです、コレ／＼此家の主人も好い男だか何うだりれよりも私の嫌にならぬか、こう云ふ調子で何時までも歸らない、それから床の上に乗つてイノ／＼兄ドンやるが淨瑠璃を語り出す忠臣蔵の十二段を初めから終りまで夜の明けるまで打通して語られる、堪つたものでは有ません尤も私も其頃は拙ながら少しく淨瑠璃を語りましたので其様な場合にまてた伴をなされたのであります

▲助八ちや喃 其代り良臣には好意を表せられました或時山王町の林助八さまが家老職を申付られました折兵庫さまは其晩早速林へ出掛け、今度は御苦勞ぢや、家老になつても必ず他の先へ物を謂はぬやうにせよられてた前の方が足らぬときは助八ちやのう、と地口を云つて直ぐと歸られたさうです、是等の舉動に依つてみますれば富山藩歴代中兵庫さまの如き逸事の多い家いた方は恐らくは他に一人もあるまいと思ひます

## 越中史料 第三卷刊行豫告

内 容

### 大地震立山變事録

總 紙 數 約二百頁内外

### 越中變事録

製本洋綴美装 全 一 冊  
定 價 約五拾錢の豫定

### 新川郡百姓一揆

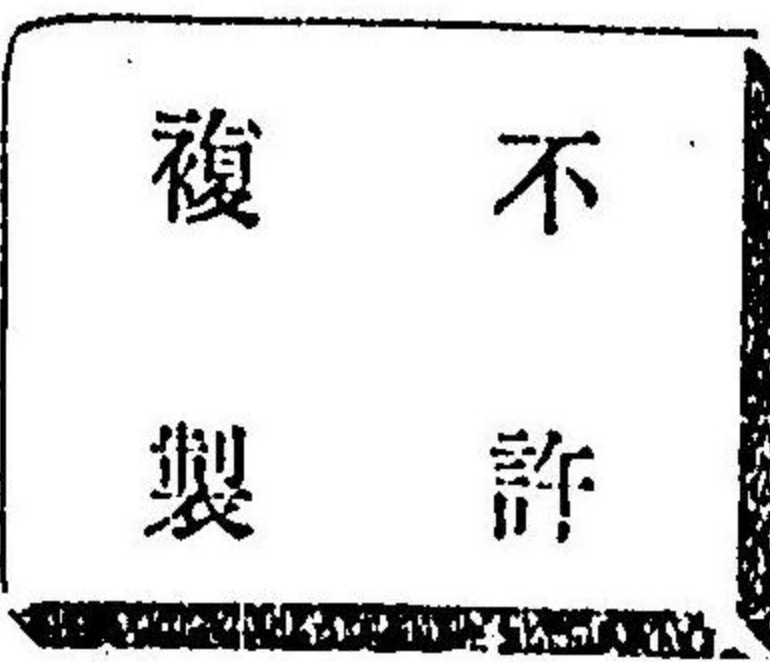
出版豫定 六 月 中

富山市西三番町 肆書 清 明 堂

本卷には新川郡百姓一揆の稿をも收むる計畫の  
 ところ印刷着手後頁数の都合により次卷へ廻せ  
 る而已ならず維新記録の如きも同一の事情を以  
 て數篇を割愛するの已むを得ざる事となり爲め  
 に多少舛裁を欠きし段は偏に陳謝する所なり依  
 つて遠からず第三卷を刊行して有益の資料を之  
 れに載せんことを期す

清明堂主人白

明治四十一年三月十五日印刷  
 明治四十一年三月二十日發行



定價金五拾錢

校訂者 中越史談會

富山市西三番町二十七番地

發行兼印刷者 福田榮太郎

富山市西三番町二十七番地  
 電話二二六番振替口座五五

清明堂書店

發行所

魚津町大字荒町

清明堂支店

賣捌所

△富山 中田 清重堂、 笠雪堂、 守川、△高岡 學海堂、 棚田  
 △上市 伊井、△滑川 高橋、△岩瀬 山本、△石動 櫻田、△福野  
 長谷川、△出町 神 澤、△氷見 中村、△新湊 小柴、

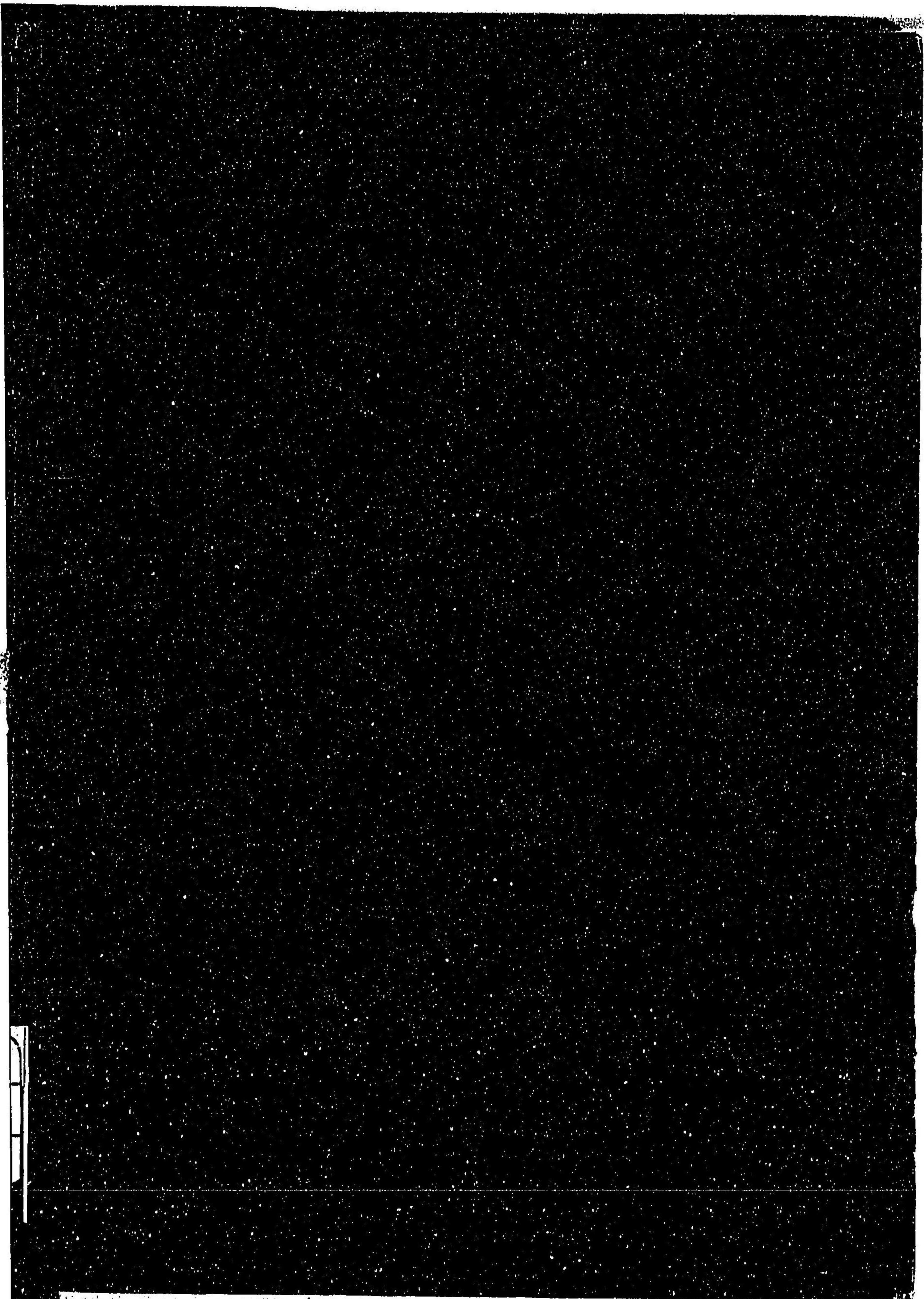
547

高麗屋  
大坂南區本橋四丁目  
電話二〇六〇

大正十五年三月十日

小牧實繁





1

THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS  
CHICAGO, ILLINOIS 60607  
1995

291.42
E92
T

